

# 非鉄金属概況

日本鉱業協会 企画調査部

## 金

### 【海外】

#### 1. 価格推移

1月相場	高値	安値
ロンドン相場(\$/toz)	: 1,323.25 (31日)	1,278.70 (21日)
国内建値(円/g)	: 4,646 (31日)	4,509 (10日)
為替相場(円/\$、TTS)	: 108.66 (4日)	110.77 (25日)

2019年1月の海外金相場は、2日に\$1,287.20/toz(トロイオンス)でスタート、中旬に一時小安くなるも、ほぼ年初から月末にかけてジリ高基調となり、7か月ぶりの\$1,300台乗せとなった。

2日に始まった金相場は、米利上げペースが一段と鈍るとの見方が浸透し、それに絡んでドルも小安く推移したことで、緩やかながらも\$1,300へ向けて上昇基調を辿った。21日には、米中貿易摩擦が緩和に向かうとの期待感が出たことで\$1,270水準へ下落するも、米株高によるドル安を背景にすぐに反発した。28日にはそのドル安に加え、米国の追加利上げ見送り観測の台頭から大幅続伸し、\$1,300台乗せとなった。さらに、30日に米連邦公開市場委員会(FOMC)で米利上げ見直しが決定されると、翌31日には\$1,323.25まで上伸し、2018年5月以来8か月ぶりの高値をつけて越月した。

#### 2. 為替相場推移

1月の為替相場は4日に\$1=108.66円(TTS相場、以下同じ)と円高値でスタート、月末で円が上昇するも、同水準を上回ることがなく、それが月間最高値となるとともに、2018年4月以来9か月ぶりの円高・ドル安水準になった。

年初にかけては、世界経済の減速が懸念されるなか、米連邦政府の一時閉鎖など経済の先行きへの不透明感も増したことで、安全資産の円を買う動きが強まった。その後、中旬にかけては、市場予想を上回る米雇用統計の発表を受けて米景気の減速懸念が後退し、円売り・ドル買いが優勢になったことや米株高でドルが反発したことで、\$1=109円水準の小動きが続いた。

下旬以降は、主として米中貿易交渉が進展するとの期待感から、低リスクとされる円の売りが優勢となったことで、円が\$1=110円水準へ下落した。ところが、月末では、

30 日の米連邦公開市場委員会(FOMC)で金融政策の現状維持を決め、追加利上げを見送ったことで、円が急反発、31 日には\$1=109.96 円をつけて翌月入りした。

1 月の円の対ユーロの動きは、月初高、月末安となった。年初は高かったが、月末にかけて続落した。英国の EU 離脱を巡る動きによって、月央では小幅な上げ下げを繰り返す場面も見られたが、月末では米利上げ見送りによる対ドルでのユーロ高を受ける格好で円も€1=126 円水準へ低下した。

## 【国内】

### 1. 建値推移

2019(平成 31)年 1 月の国内金山元建値は 4 日に 4,514 円/g(グラム)でスタート、10 日に 4,509 円まで落ち込むものの、その後は海外相場の上げに合わせ、ほぼ一本調子で上昇した。28 日には 4,600 円台に乗せ、31 日には 4,646 円と月間最高値をつけるとともに、前の年 6 月以来 7 か月ぶりの高値をつけて越月した。

### 2. 金地金生産・出荷・生産者在庫(2018 年 12 月分=平成 30 年 12 月分)

生産 : 10,120 kg (前月比 14.1%増、前年比 5.7%増)

出荷 : 8,826 kg (前月比 16.3%減、前年比 12.2%減)

在庫 : 5,991 kg (前月比 27.6%増、前年比 22.6%増)

(生産、出荷、在庫の出典は経産省生産動態統計調査)

12 月の生産は前月比、前年同月比とも増、後者の前年同月比は 11 か月連続の増と堅調。出荷は前月の反動から前月比、前年同月比とも減で、本年 1 月以来の低水準。在庫は出荷減から前月比、前年同月比とも二桁増。

### 3. 金地金生産・出荷・生産者在庫(2018 暦年計=平成 30 暦年計)

生産 : 124,352 kg (前年比 12.8%増)

出荷 : 123,247 kg (前年比 10.1%増)

在庫 : 5,991 kg (前年比 22.6%増)

(生産、出荷、在庫の出典は経産省生産動態統計調査)

2018 年の生産は 2 年ぶりの前年比増で、2011(平成 23)年の 132t 以来 7 年ぶりの高水準。出荷も生産見合いで 2 年ぶりの前年比増で、こちらも 2011(平成 23)年の 130t 以来の高水準。在庫は年央にかけて 4t 台へ減少するも、年初と年末は 5~6t 台で推移した。

銅

## 【海外】

2019年のLME銅相場は1月2日、\$5,839/tでスタートし、前年に引き続き米中貿易摩擦や米中両国の景気指標を材料に月間を通じて\$6,000割れを低迷推移したが、月末にかけては貿易協議の進展や米国の利上げ見送りが好感されて\$6,000台を回復した。

米中貿易協議は1月7～9日に実施され、中国側が対米貿易黒字を2024年までにゼロにする計画を提案したと伝えられた。1月末には、米国産農産物の輸入拡大方針を伝え、また、2月に両国首脳会談の開催を提案した。3月1日までに協議がまとまらなければ、米国は対中制裁関税第3弾の税率を10%から25%に引き上げる。

米国経済は強弱材料が交錯した。年初早々、アップルが中国の景気減速の影響で業績見通しを下方修正した。また、米供給管理局(ISM)の12月の製造業景況指数(PMI)は前月比5.2ポイント減と1か月の低下幅としてはリーマンショック当時の2008年10月以来の大きさで、2016年11月以来の低水準に落ち込んだ。一方、12月の非農業部門雇用者数は2月以来の大幅増、失業率も49年ぶりの低水準であった11月の3.7%から3.9%への小幅な上昇にとどまった。こうしたなか、米連邦準備制度理事会(FRB)は30日の連邦公開市場委員会(FOMC)で金融政策の現状維持を決め、追加利上げを見送った。また、2017年秋から続く量的引き締めも修正する用意があると言明した。

中国経済は12月の財新/マークイット製造業PMIが19か月ぶりに50を下回り、国家统计局PMIも50割れで2016年12月以来の低水準となった。12月の生産者物価指数(PPI)上昇率は2016年9月以来の低水準、消費者物価指数(CPI)も6か月ぶりの低水準となった。また、12月の輸出入はともに前年同月比減となり、輸出以上に輸入の落ち込みが大きかった。さらに、2018年の実質GDP成長率は6.6%増と2年ぶりの減速で1990年以来の低水準となった。第4四半期は前期比0.1%減と3期連続の減速で2009年第1四半期以来の低水準。このため、中国人民銀行は15日と25日に市中銀行の預金準備率を引き下げた。全銀行を対象とするのは2016年3月以来。

ヨーロッパでは、英国下院がブレグジット協定案を反対432票、賛成202票の大差で否決し、英国の「合意なきEU離脱」への懸念が高まった。

こうした状況下、国際通貨基金(IMF)は2019年の世界経済の成長率を3.7%から3.5%に下方修正し、3年ぶりの低水準となると予想した。

供給障害要因としては、インペリアルメタルズは1月7日、マウントポリー銅鉱山(加)を価格低迷のため閉鎖したと発表した。低品位貯鉱の選鉱操業は3月末まで継続する。環境モニタリングや環境改善コスト負担も操業停止の理由。

アングロアメリカンは1月30日、ロスブロンセス銅鉱山(チリ)で生産性向上計画の一環として労働者180名をレイオフしたと発表した。この発表に先立ち、労組は一時

的に職場放棄し、今後の抗議活動を予告した。

ファーストクオンタムミネラルズのラスクルス銅鉱山(スペイン)のオープンピットで1月23日、地滑りが発生し、鉱山、SXEWプラントの操業を停止したが、2月1日、低品位鉱石の選鉱操業を再開したと発表した。また、監督当局から鉱山の部分再開も許可された。

コンコラカパーマインズ(KCM)は銅精鉱輸入に関税が導入されたことから、ヌチャング銅鉱山(ザンビア)の操業を1月4日から停止すると従業員に通知したが、その後撤回した。

ヴェダンタリソーシズは1月8日、インド最高裁が子会社スターライトカパーのツーチコリン銅製錬所に対する下級審の再開命令を支持したと発表した。これにより操業再開の法的障害が解消された。同製錬所は生産能力倍増計画に対する地元住民の抗議活動のため2018年3月末から操業停止中。再開時期は今年後半になる予想。

三菱マテリアルは1月17日、PTスメルティングのグレシック銅製錬所(インドネシア)を12月半ばに部分再開したことを確認した。同製錬所は11月末まで定修閉鎖を予定していたが、隣接する酸素工場の閉鎖期間の延長のため、再開が1か月間延長され、銅精鉱の受け入れに不可抗力条項が発動された。

需給動向については、2018年1~10月の世界の銅鉱石生産は前年同期比2.3%増の16,861千t、地金生産は1.2%増の19,635千t、消費は2.8%増の20,183千t、地金需給バランスは▲224千tから▲547千tへと供給不足幅が拡大した。報告在庫は11.5%減の1,245千t、在庫/消費比率は2.9週間から2.5週間へと低水準で推移している。

鉱石生産の内訳は精鉱が2.3%、SXEWは2.6%増加した。国別にはチリが前年2~3月にストに見舞われたエスコンディーダ鉱山の反動増により6%増加。1~4月に精鉱輸出が禁止されたインドネシアは19%増加した。コンゴ民主共和国(DRC)とザンビアのSXEW生産は休止鉱山の再開によりそれぞれ12%、8%増加した。この間大規模な供給障害はなかったが、カナダ、米国は一部の鉱山が生産低下のためそれぞれ11%、3.5%減少した。ここ数年、鉱山の新規稼働や能力増強により急増していたペルーは伸びが平準化した。地域別にはアフリカが8%、ラテンアメリカは3.5%、アジアは2%、オセアニアは10%増加したが、ヨーロッパは横ばい、北米は5%減少した。鉱山稼働率は81.7%から82.8%に上昇した。

地金生産の内訳は一次生産がほぼ横ばい、二次生産は5%増加した。国別には中国が能力増強を背景に増加した。チリは一連の定修閉鎖があった前年比2%増加した。しかしながら、2016年1~10月累計比は6%減少した。昨年ストライキに見舞われたインドネシア、大型定修があった日本も実質的に増加した。DRC、ザンビアのSXEW生産も増加した。一方、4月にツーチコリン製錬所が閉鎖されたインドは

34%減少、オーストラリア、フィリピン、ポーランド、米国も定修や操業トラブルの影響で減少した。地域別にはアフリカが 10%、アジアは 1%、ラテンアメリカは 2%増加したが、ヨーロッパとオセアニアは実質的に横ばい、北米は 4%減少した。精製工場の稼働率は 85.4%で横ばい推移した。

中国の見掛け消費(未報告在庫の増減を除外)はネット輸入がスクラップ供給タイト化を背景に 25%増加したことから 7%増加した。インド、日本、米国、EU は増加し、台湾、韓国は減少した。中国を除く世界は 0.5%減少した。

## 【国内】

### 1. 建値推移(千円/t)

1/7 690    1/11 680    1/17 690    1/28 710    2/6 720

### 2. 銅地金生産・出荷・生産者在庫(2018年12月分=平成30年12月分)

生産 : 137,000t (前月比 14.4%増、前年比 12.0%増)  
出荷 : 121,700t (前月比 14.5%減、前年比 0.6%増)  
在庫 : 98,700t (前月比 24.9%増、前年比 3.8%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

2018(平成30)年12月の銅地金生産は前月比14.4%増、前年同月比12.0%増の137.0千tで、それぞれ2か月ぶり、5か月連続の増加となった。出荷は前月比14.5%減、前年比0.6%増の121.7千tで、4か月ぶりの減少と3か月連続の増加。内訳は内販が前月比11.9%減、前年比横ばいの81.9千tで4か月ぶりの減少と3か月連続の増加。輸出は前月比19.4%減、前年比1.7%増の39.9千tで4か月連続の減少と3か月連続の増加。内販のうち電線向けは前年比3.3%減の51.2千tで3か月ぶりの減少。伸銅品向けは5.3%増の27.5千tと2か月ぶりの増加。在庫は前月比24.9%増、前年比3.8%増の98.7千tで4か月ぶり、7か月ぶりの増加となった。

### 3. 銅地金生産・出荷・生産者在庫(2018暦年計=平成30暦年計)

生産 : 1,594,500t (前年比 7.2%増)  
出荷 : 1,610,600t (前年比 6.0%増)  
在庫 : 98,700t (前年比 3.8%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

2018(平成30)暦年の銅地金生産は前年比7.2%増の1,594.5千tと平成19年(1,576.8千t)を抜いて史上最高となった。佐賀関、東予製錬所が前年、大型定修により生産効率が改善されたことが主因。出荷は6.0%増の1,610.6千tと2014(平成26)年(1,605.3千t)を抜いて史上最高。内訳は内販が0.7%増の989,380tで2年連続の増加、輸出は15.9%増の621,231t。内販のうち電線向けは4.3%増の620,179t、

伸銅品向けは 2.7%減の 335,269t。在庫は年間を通じて 100 千t水準を推移した。

#### 4. 需要部門別動向

日本電線工業会によれば、2018(平成 30)年 12 月の銅電線出荷は前月比 11.6%減、前年同月比 1.4%減の 56.7 千t(推定)と前年比は 3 か月ぶりの減少。うち内需は前年比 1.3%減の 54.9 千tで 3 か月ぶりの減少、輸出は 2.6%減の 1.8 千tで 2 か月ぶりの減少。内需の部門別には、自動車と建設電販が 3 か月連続、通信が 2 か月ぶりの増加、電気機械と電力は 4 か月連続、その他内需は 3 か月ぶりの減少となった。

日本伸銅協会によれば、2018(平成 30)年 12 月の伸銅品生産は前月比 8.1%減、前年同月比 0.6%減の 65.8 千t(速報)と 3 か月ぶりの前年比減。うち内需向けは前年比 0.5%増の 54.5 千tで 5 か月連続の増加、輸出は 5.6%減の 11.3 千tで 2 か月連続の減少。品種別には、エアコン向けの銅管が 5 か月連続の増加、半導体、コネクタ、自動車端子向けの黄銅条は 2 か月ぶりの増加、自動車端子向けの銅条は 3 か月ぶり、コネクタ向けの青銅板条は 5 か月連続の減少となった。

### 鉛

#### 【海外】

2019 年の LME 鉛相場は 1 月 2 日、\$1,975/t でスタートし、前年に引き続き米中貿易摩擦や米中両国の景気指標を材料に月間を通じて \$2,000 割れを低迷推移したが、月末にかけては貿易協議の進展や米国の利上げ見送りが好感されて \$2,000 台を回復した。

米中貿易協議は 1 月 7~9 日に実施され、中国側が対米貿易黒字を 2024 年までにゼロにする計画を提案、1 月末には米国産農産物の輸入拡大方針を伝え、また、2 月に両国首脳会談の開催を提案した。3 月 1 日までに協議がまとまらなければ、米国は対中制裁関税第 3 弾の税率を 10%から 25%に引き上げる。

米国経済は強弱材料が交錯した。年初早々、アップルが中国の景気減速の影響で業績見通しを下方修正した。また、米供給管理局(ISM)の 12 月の製造業景況指数(PMI)は 1 か月の低下幅としては 2008 年 10 月以来の大きさを、2016 年 11 月以来の低水準に落ち込んだ。一方、12 月の非農業部門雇用者数は 2 月以来の大幅増、失業率も 49 年ぶりの低水準であった 11 月の 3.7%から 3.9%への小幅な上昇にとどまった。こうしたなか、米連邦準備制度理事会(FRB)は 30 日の連邦公開市場委員会(FOMC)で金融政策の現状維持を決め、追加利上げを見送った。また、2017 年秋から続く量的引き締めも修正する用意があると言明した。

中国経済は12月の財新/マークイット製造業PMIが19か月ぶりに50を下回り、国家统计局PMIも50割れで2016年12月以来の低水準となった。12月の生産者物価指数(PPI)上昇率は2016年9月以来の低水準、消費者物価指数(CPI)も6か月ぶりの低水準となった。また、12月の輸出入はともに前年同月比減となり、輸出以上に輸入の落ち込みが大きかった。さらに、2018年の実質GDP成長率は6.6%増と2年ぶりの減速で1990年以来の低水準となった。第4四半期は前期比0.1%減と3期連続の減速で2009年第1四半期以来の低水準。このため、中国人民銀行は15日と25日に市中銀行の預金準備率を引き下げた。全銀行を対象とするのは2016年3月以来。

ヨーロッパでは、英国下院がブレグジット協定案を反対432票、賛成202票の大差で否決し、英国の「合意なきEU離脱」への懸念が高まった。

こうした状況下、国際通貨基金(IMF)は2019年の世界経済の成長率を3.7%から3.5%に下方修正し、3年ぶりの低水準となると予想した。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2018年1~11月の世界の鉛鉱石生産は前年同期比2.0%減の4,195千t、地金生産は1.0%増の10,677千t、消費は10,772千tで横ばい、地金需給バランスは前年同期の▲172千tから▲95千tへと供給不足幅がやや縮小した。

鉱石生産はオセアニアが5.0%、ヨーロッパは1.5%、アフリカは4.4%増加、アジアは3.4%、アメリカは3.6%減少した。国別には、オーストラリア、マケドニア、モロッコが増加したが、中国、カザフスタン、ペルー、南アフリカ、スウェーデン、米国は減少した。地金生産はアジアが1.1%、オセアニアは27.3%、アフリカは3.6%増加、アメリカは横ばい、ヨーロッパは1.2%減少した。国別には、オーストラリア、インド、米国が増加したが、カナダ、ドイツは減少した。消費はアジアが1.7%、アフリカは3.7%、オセアニアは6.7%増加、ヨーロッパは横ばい、アメリカは4.8%減少した。国別には、チェコ、フランスが減少した。11月末の地金の報告在庫は前年同月比13.0%減の396千t、在庫/消費比率は2.0週間から1.6週間にやや低下した。

中国は鉱石生産が4.0%減の1,868千t、鉛精鉱輸入は4.4%減の624千t、地金生産は4,450千tで横ばい、地金のネット輸入は18.2%増の91千t、この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫)は1.2%増の4,575千tとなった。

## 【国内】

### 1. 建値推移(千円/t)

1/7 274      1/22 283      2/1 291

1月の鉛建値はLME鉛相場が月末にかけて上昇したため、それに合わせて上方修正された

## 2. 鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2018年12月分=平成30年12月分)

生産 : 17,547t (前月比 6.3%増、前年比 0.5%増)  
出荷 : 17,304t (前月比 4.1%減、前年比 3.7%増)  
在庫 : 13,588t (前月比 0.9%増、前年比 39.2%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

12月の生産は前月比、前年同月比とも2か月ぶりの増。廃バッテリー原料の入荷は上昇。出荷は需要期が終わりに近づいたことで前月比減だが、前年同月比はプラスへ転換。営業関係者の話によると、年明け以降も小じっかりとした展開になっているとのこと。在庫は前月比微増、前年同月比でも10か月連続の増。

## 3. 鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2018暦年計=平成30暦年計)

生産 : 196,561t (前年比 1.4%減)  
出荷 : 192,038t (前年比 8.1%減)  
在庫 : 13,588t (前年比 39.2%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

2018年の生産は前年比微減の197千tと3年ぶりにマイナス、2015(平成27)年の194千t以来3年ぶりの低水準。出荷は前の年の2017年の下半期の軟調推移を引き継いだことで、年間を通して弱含みの展開となり、2015(平成27)年以来3年ぶりの前年比減。前の年の2017年とは対照的に、内販はリーマンショックの影響を受けた2009(平成21)年の164千t以来の低水準、出荷計も1969(昭和44)年の189千t以来49年(約半世紀)ぶりの記録的な低水準となった。在庫は出荷減から年央にかけて18千t台に向けてやや積み上がり傾向となったが、年末には販売増からほぼ年初と同じ13千t台で推移している。

## 4. 需要部門動向

11月の自動車生産台数は前年同月比4.6%増の886,966台となり、2か月連続で前年同月を上回った。乗用車は前年同月比2か月連続のプラス、トラックも同3か月連続のプラス、バスは同3か月ぶりのプラスとなった。

12月の自動車輸出台数は前年同月比0.2%増の434,349台となり、2か月ぶりに前年同月を上回った。2018年では前年比2.4%増の4,817,470台となり4年連続で増加した。

一方、11月の二輪車生産台数は前年同月比4.9%増の59,940台と3か月連続で前年同月を上回った。

(一社)電池工業会の調査によると、11月の自動車用鉛蓄電池のメーカー販売個数は、新車用、補修用、輸出用を併せた総合計で2,417千個(前年同月比5%減)と2か月ぶりに低下、自動車用以外の鉛蓄電池も635千個(同3%減)と4か月連続で



減少した。その結果、鉛蓄電池の出荷はトータルで3,052千個(同5%減)と2か月ぶりに低下した。

#### 鉛関連製品生産統計

		10月	11月
自動車	数量(台)	883,751	886,966
	前年同月比(%)	106.3	104.6
自動車用鉛蓄電池	数量(鉛量t)	19,324	18,823
	前年同月比(%)	105.5	104.7

(出所: (一社)日本自動車工業会, 経済産業省生産動態統計調査)

#### 亜鉛

#### 【海外】

2019年のLME亜鉛相場は1月2日、\$2,462/tでスタートし、前年に引き続き米中貿易摩擦や米中両国の景気指標を材月間を通じて\$2,500水準を低迷推移したが、月末にかけては貿易協議の進展や米国の利上げ見送りが好感されて\$2,700台を回復した。

米中貿易協議は1月7~9日に実施され、中国側が対米貿易黒字を2024年までにゼロにする計画を提案、1月末には米国産農産物の輸入拡大方針を伝え、また、2月に両国首脳会談の開催を提案した。3月1日までに協議がまとまらなければ、米国は対中制裁関税第3弾の税率を10%から25%に引き上げる。

米国経済は強弱材料が交錯した。年初早々、アップルが中国の景気減速の影響で業績見通しを下方修正した。また、米供給管理局(ISM)の12月の製造業景況指数(PMI)は1か月の低下幅としては2008年10月以来の大きさで、2016年11月以来の低水準に落ち込んだ。一方、12月の非農業部門雇用者数は2月以来の大幅増、失業率も49年ぶりの低水準であった11月の3.7%から3.9%への小幅な上昇にとどまった。こうしたなか、米連邦準備制度理事会(FRB)は30日の連邦公開市場委員会(FOMC)で金融政策の現状維持を決め、追加利上げを見送った。また、2017年秋から続く量的引き締めも修正する用意があると言明した。

中国経済は12月の財新/マークイット製造業PMIが19か月ぶりに50を下回り、国家統計局PMIも50割れで2016年12月以来の低水準となった。12月の生産者物価指数(PPI)上昇率は2016年9月以来の低水準、消費者物価指数(CPI)も6か月ぶりの低水準となった。また、12月の輸出入はともに前年同月比減となり、輸出以上に輸入の落ち込みが大きかった。さらに、2018年の実質GDP成長率は6.6%増と

2年ぶりの減速で1990年以来の低水準となった。第4四半期は前期比0.1%減と3期連続の減速で2009年第1四半期以来の低水準。このため、中国人民銀行は15日と25日に市中銀行の預金準備率を引き下げた。全銀行を対象とするのは2016年3月以来。

ヨーロッパでは、英国下院がブレグジット協定案を反対432票、賛成202票の大差で否決し、英国の「合意なきEU離脱」への懸念が高まった。

こうした状況下、国際通貨基金(IMF)は2019年の世界経済の成長率を3.7%から3.5%に下方修正し、3年ぶりの低水準となると予想した。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2018年1~11月の世界の亜鉛鉱石生産は前年同期比1.7%増の11,809千t、地金生産は12,051千tで横ばい、消費は1.1%減の12,377千t、地金需給バランスは前年同期の▲435千tから▲326千tへと供給不足で推移した。

鉱石生産はアメリカが1.4%、オセアニアは31.0%、ヨーロッパは5.1%、アフリカは13.6%増加、アジアは3.1%減少した。国別には、オーストラリア、フィンランド、ギリシャ、マケドニア、ロシア、米国が増加したが、ポーランド、スウェーデン、カナダ、中国、インド、メキシコは減少した。地金生産はヨーロッパが3.3%、アメリカは8.2%、オセアニアは3.4%増加、アジアは3.0%、アフリカは14.7%減少した。国別には、オーストラリア、ベルギー、カナダ、フィンランド、メキシコ、ノルウェー、ペルーが増加、中国、インドは減少した。消費はヨーロッパが1.4%、アメリカは5.5%、オセアニアは1.4%増加、アジアは2.8%、アフリカは9.7%減少した。国別には、ベルギー、ノルウェー、ポーランドが増加、中国、韓国、南アフリカ、台湾、ドイツは減少した。11月末の地金の報告在庫は前年同月比17.5%減の872千t、在庫/消費比率は3.7週間から3.0週間へと低下した。

中国は鉱石生産が5.2%減の4,033千t、亜鉛精鉱輸入は21.3%増の1,238千t、地金生産は2.7%減の5,177千t、地金のネット輸入は6.9%増の622千t、この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫/国家備蓄)は2.8%減の5,819千tとなった。

## 【国内】

### 1. 建値推移(千円/t)

12/3	352	12/6	361	12/11	349	12/18	343	12/25	325	1/7	322
1/11	316	1/17	322	1/22	334	1/28	346	2/1	349		

1月の亜鉛建値は、鉛同様、LME 亜鉛相場が月末にかけて上昇したため、それに合わせて上方修正された。

### 2. 亜鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2018年12月分=平成30年12月分)

生産 : 49,296t (前月比 8.0%増、前年比 1.6%減)  
出荷 : 45,237t (前月比 0.9%減、前年比 5.4%減)  
在庫 : 59,960t (前月比 8.0%増、前年比 11.7%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

12月の生産は前月比増だが、前年同月比は2か月ぶりの減。出荷は年末でも内販がさえず、前月比微減、前年同月比も依然マイナスのまま推移。前月に引き続き、秋の落ち込みを挽回できず。前月比2か月ぶりのマイナス、前年同月比7か月連続のマイナス。在庫は2か月連続の前月比増だが、前年同月比では3か月連続の減。

### 3. 亜鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2018 暦年計=平成 30 暦年計)

生産 : 521,110t (前年比 0.5%減)  
出荷 : 533,465t (前年比 1.2%減)  
在庫 : 59,960t (前年比 11.7%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

2018年の生産は通常の定修などはあったものの、前年比0.5%減の521千tと5年連続で減少した。これは2016、2017年に引き続き、3年連続して1967(昭和42)年の520千t以来51年ぶりの低水準となった。前の年の2017(平成29)年にプラスに転じた出荷は、2017年年末の低迷を引きずったうえ、さらには年央にかけて西日本を中心とした災害や地震等によるユーザーの生産不調や生産停止等の影響を受け、前年比1.2%減の533千tへ再び減少した。これは近年でも最も低かった2016(平成28)年の535千tを下回り、生産同様、1967(昭和42)年の520千t以来51年ぶりの低水準となった。在庫は主として生産減から減少基調を辿った。1年をかけて、年初の70千t台から年末の50千t台へ低下した。

### 4. 需要部門動向

12月の鉱工業生産指数は前月比0.1%減、前年同月比1.9%減の104.7(季節調整済、2015年=100基準、速報値、以下同じ)となった。前月比は2か月連続で低下、前年同月比は3か月ぶりの低下となった。半導体関連の生産が低調だった。経産省は「生産は緩やかに持ち直している」に据え置いた。

2018(平成30)年第4四半期指数値は105.1となり、それは、2018年で最も高い水準となった。2018年の指数値は104.1、前年比1.0%増と、前年2017年に続き前年比上昇となった。

12月の出荷指数は前月比0.3%増の103.6と2か月ぶりに上昇したが、前年同月比は2.8%減と3か月ぶりに低下した。

一方、在庫指数は前月比1.0%増の102.4、在庫率指数も前月比2.2%増の104.7となった。

大企業の生産見通しを示す製造工業生産予測指数では、1 月が前月比 0.1%の低下、2 月は同 2.6%の上昇を見込んでいる。

11 月の亜鉛めっき鋼板生産は前年同月比 2 か月ぶりの減となった。

11 月の伸銅品生産量は 71,649t(確報値、対前年同月比+0.7%)(対前月比▲2.2%)、対前年同月比は 2 か月連続のプラス(9 月▲0.8%、10 月+2.5%)。11 月対比でこれ以前の高い数量をさかのぼると 2010(平成 22)年の 73,612t 以来の高水準。全 14 品種中、対前年比プラスは 8 品種。内需向け生産:59,415t(速報値、以下同じ)、4 か月連続の対前年比プラス(+0.8%)。輸出向け生産:12,226t、2 か月連続の対前年比プラス(+0.4%)。

黄銅製品では、黄銅条が 9,352t(対前年比▲4.6%)、3 か月振りの対前年比マイナス。黄銅棒は 16,544t、3 か月振りの対前年比プラス(対前年比+1.6%)。対前月比では本年 9 月以降 3 か月連続して増加。ガス機器、水栓金具、バルブ向けのいずれも安定的に推移している。

#### 亜鉛関連製品生産統計

		10 月	11 月
亜鉛めっき鋼板	数量(千t)	895	852
	前年同月比(%)	101.6	98.5
黄銅製品	数量(t)	30,405	29,798
	前年同月比(%)	103.4	99.4
亜鉛ダイカスト	数量(kg)	1,487,197	1,606,744
	前年同月比(%)	87.8	95.4
亜鉛華	数量(t)	6,520	5,909
	前年同月比(%)	106.1	108.2

(出所:(一社)日本鉄鋼連盟、経済産業省生産動態統計調査)